

# 談話標識と文脈

Discourse markers and contexts

松尾 文子\*

Fumiko Matsuo

キーワード：談話標識、文脈、発話意図

Key words : discourse markers, contexts, utterance intention

## 要旨

### 談話標識と文脈

本研究では、談話標識を文脈という観点から考察する。談話標識は、話し手（書き手）からすると自分の発話意図を伝える手がかりであり、聞き手（読み手）にとっては話し手（書き手）の発話意図を読み取る手がかりである。談話標識と文脈の関りを、以下の3つの項目に分けて実例を示して明らかにする。まず、類義表現との違いを考える際に、談話標識が用いられる文脈を精査する必要があることを、still を例に述べる。次に、一連の談話の文脈の情報の流れと談話標識の文中における位置には密接な関係があることを、according to と however を例に論じる。最後に、談話標識が用いられる主文の言語情報だけで話し手の発話意図を理解するのが困難な場合には、談話標識が発話意図の明確化の手がかりとなり、明確化には先行文脈から得られる情報を読み解く必要があることを述べる。談話標識と文脈は相互に影響を与えながら、一連の表現を作り上げるのだ。

---

\* 札幌保健医療大学保健医療学部看護学科 Department of Nursing, School of Health Sciences, Sapporo University of Health Sciences

## Ⅰ. はじめに

本研究では、談話標識を文脈という観点から考察する。談話標識は、話し手（書き手）からすると、自分の発話意図を伝える手がかりであり、聞き手（読み手）にとっては、話し手（書き手）の発話意図を読み取る手がかりである。一連の談話の情報の流れに気を付けて文脈を読み込み、読み取ることで、談話標識の機能が明らかになる。また、談話標識が表現を豊かにすることに寄与していることが分かる。一連の談話の文脈によって、どの談話標識を用いるかが決まる一方で、談話標識が文脈を作る側面もある。談話標識が用いられた発話は、後続の談話の先行文脈となるからである。談話標識は文字通り、談話の中で真価を発揮する。談話標識と文脈は相互に影響を与えながら、一連の表現を作り上げる。

本稿の構成は以下のとおりである。Ⅱ.では談話標識とは何かを簡単に述べる。Ⅲ.では still を例に、広範囲の文脈から得られる情報を読み取る必要性を論ずる。Ⅳ.では、情報の流れと文中における談話標識の位置の関係を、Ⅴ.では、談話標識による発話意図の明確化と先行文脈から得られる情報の読み取りについて論ずる。

なお、「発話・文」の表記法であるが、基本的に当該の表現が実際の発言の場合は「発話」、そうでない場合は「文」とする。

## Ⅱ. 談話標識とは何か

談話標識は、「聞き手が発話を正しく理解できるように話し手の発話意図を合図する」というコミュニケーション上の役割を担う。その合図には用いられる文脈に応じて、以下のようなものがある。話し手が談話をどのように組み立てていくかを合図する「談話構成機能」、話し手が情報を受け取ったことや、情報を聞き手と共有したかなどを合図する「情報授受・交換機能」、話し手がこれからど

のようなスタンスで陳述するのかを合図する「態度・感情表明機能」、会話を円滑に進めるために、話し手と聞き手の人間関係を調整する「対人関係調整機能」である。具体的には、松尾・廣瀬・西川（2015）<sup>1)</sup>を参照されたい。

## Ⅲ. 再主張の still：広範囲の文脈を読み取る必要性

### Ⅲ- 1. still が用いられる談話構造

本論における「文脈」には、言語表現そのもので示される文脈、話し手（書き手）と聞き手（読み手）が共有している知識、一般常識や世界に関する知識、さらには会話の場合には当該の会話が行われる場面や状況も含める。

対比、逆接や譲歩を表す談話標識は、先行発話の内容と対照的であったり矛盾することを述べる合図となる。このような談話標識には、but, however, though, yet, nevertheless, still などがあるが、still の働きを理解するには広範囲の文脈を読み取る必要がある。このことは、類義のほかの談話標識とは異なる点である。

still が用いられる談話の構造は以下のとおりである。しばしば P（自らの意見）/ Q（予想される反論）/ still P'（反論に対する反論）の構造で用いられ、QではPと矛盾する情報が示され、さらに P'ではQと矛盾する情報が示される。P'ではPを支持する情報が示され、話し手はQを示しておきながら自らそれを否定することになる。先行発話に対して逆接的な内容を表すが、全体的には最初に提示された自らの見解の妥当性を主張する（Bell 2010：1918-1922）。<sup>2)</sup>したがって、still に後続する P'ではPを再主張することになる。

このように、still は先行するQと対立し、かつPを再主張する内容を導入することを合図する。なお、P、Q、P'がそれぞれの発話や文で表される文字通り意味するところである場合もあるが、発話意図や含意の場合も

ある。still が用いられる談話の構造を図式化すると、以下のようになる。

still が用いられる談話構造

P ⇔ Q ⇔ P'    ⇔ : 反対の主張  
 [            ]    — : 同じ主張

**III- 2. still が用いられる談話の文脈と情報の流れ**

P/Q/ still P'において、Pは直前の談話で示されることもあるが、少し前の談話で示されたり、物語などのそれまでの部分から推測できる、すなわち暗示的に示されることもあり、still の用いられ方を理解するには広範囲の文脈を考慮する必要がある(注1)。これら3種類のPを順に見ていく。

**III- 3. Pが直前の談話で示される場合**

次例は、話し手とその友人のエツコのやり取りである。エツコは以前は裕福だったが、今はぎりぎりの生活をしていて、生活費を稼ぐためにうどん屋で働いている。

(1) “How are you getting on here?” I asked her. “How am I getting on? Well, Etsuko, it’s certainly an amusing sort of experience, working in a noodle shop. I must say, I never imagined I’d one day find myself scrubbing tables in a place like this. *Still*” —she laughed quickly—“it’s quite amusing.” —Ishiguro, *Pale View* (「ここのお仕事はどう？」と私は彼女に尋ねた。「どうって？そうね、エツコさん、うどん屋で働くっておもしろい経験よ。本当に、自分がいつかこんなところでテーブルを拭くなんて、想像もつかなかったわ。それでも」と言うと同時に、彼女は笑って、「とってもおもしろいわ」と言った。)

ここでは、「うどん屋で働くことはおもしろ

い」(=P) という情報が、話し手本人の同じターン(引用符で囲まれた発話の集まり)で提示されている。Qは、「(かつては裕福だった)自分がうどん屋でテーブルを拭くという不本意な仕事をしている」ということである。そして still を介して、「それでもこの仕事はおもしろい」(=P') と先に述べたことを再主張している。これらのことをまとめると、以下のようになる。

P : うどん屋で働くことはおもしろい。  
 Q : うどん屋でテーブルを拭くとは思わなかった → 不本意な仕事である。  
 P' : (それでも) うどん屋で働くことはおもしろい。

**III- 4. Pが少し前の談話で示される場合**

次例は、嫁と舅の一連の会話の中の舅の発話である。この発話の少し前に、次のような発話がある。舅の娘キクコが、同居している義父(=ワタナベの爺さん)が威張っていて手に負えなくなって困っていると、不服を言っていた。だから、若夫婦が親と別居するのは悪いことではない (It’s no bad thing, young couples living away from the parents.) と、舅が言った。この発話がPである。舅の発話にツツジが出てくるが、結婚が決まった時に、息子の嫁が門の脇にツツジが植えられていない家には住まないと言い張ったので、舅はツツジを植えた。ツツジを巡るやり取りがしばらく続く。その後で次の発話がなされる。

(2) “The azaleas came up beautifully. But by that time, of course, you’d moved away. *Still*, it’s no bad thing at all, young couples living on their own. Look at Kikuko and her husband. They’d love to have a little place of their own, but old Watanabe won’t even let them consider it. What an old war-lord he is.” —Ishiguro, *Pale View* (「ツツジは見事に

咲いたよ。でも、その時までには、もちろん、あなたたち夫婦は引っ越していた。だがやはり、悪いことではないよ、若い夫婦が独立して暮らすのは。キクコ夫婦を見てごらん。ささやかでも自分の家で自分たちだけで暮らしたいのに、ワタナベの爺さんは考えてやろうともしない。何て独善的な奴なんだ」)

ツツジを植えて息子夫婦が同居する条件を整えたが、夫婦は家を出てしまった。これがQである。それでも、「若い夫婦が独立して暮らすのは悪いことではない」と still 以下でPを再主張している。これらのことをまとめると、以下ようになる。

P: 若夫婦が親と別居するのは、悪いことではない。

Q: 同居の条件であるツツジを植えて息子夫婦が親と同居するはずが、花が咲く頃には引っ越してしまった → 同居できなくて残念である。

P': (それでも) 若夫婦が親と別居するのは悪いことではない。

### III- 5. Pが暗示的に示される場合

次例は、ロンドン警視庁顧問のホーソンとある女性が雇っている弁護士ケンワージーの会話である。弁護士は約10年前に彼女が起こした交通事故のことを思い出して語っている。

(3) "How do you do? Yes, yes. I'm Charles Kenworthy. This is Frieda."... "Did you advise her at the time of the trial?" Hawthorne asked. "Absolutely." Kenworthy couldn't help himself. He didn't just talk. He gushed. "There was no case against her. The judge was absolutely right." "Did you know him?" "Weston? We'd met once or twice. A fair-minded chap. I told her she had nothing to worry about, no matter what the newspapers said. *Still*, it was a difficult time for her. She

was very upset."—Horowitz, *Word* (「はじめまして。ええ、私がチャールズ・ケンワージーです。こちらはフリーダです」…「あの(事故の)裁判のとき、彼女にアドバイスしたのですか?」ホーソンは尋ねた。「そのとおりです」ケンワージーは話さずにはいられない様子だった。単に話すのではなく、言葉がほとぼしり出るようだった。「彼女に不利な事実はありませんでした。裁判官の判断は、絶対に正しかったんです」「裁判官をご存知だったのですか?」「ウェストンですか? 1、2度会ったことがあります。公正な人間ですよ。私は彼女に新聞が何を書こうが、何も心配することはないと言ったんです。それでもやはり、あの時期は彼女にとって大変だったのでしょう。ひどく取り乱していました」)

彼女は双子の兄弟を轢いてしまい、1人は死亡、もう1人は脳に深刻な損傷を負った。しかし、裁判で法律に照らして拘禁刑が適用されて罪が軽くなった。そのことで彼女は世間の非難をあびて、辛い時を過ごした。ケンワージーとホーソンは初対面で、また、当該の会話でこのことは触れられていないが、話し手の弁護士の記憶にある10年前のことがPである。Qで、「当時、彼女に不利な証拠はないから新聞が何を書きたてても心配するなど励ました」、すなわち話し手としては、彼女が勇気づけられたと考えている。そして still 以下で、「それでもやはり、あの時期は彼女にとって大変だった」とPを再主張している。これらのことをまとめると、以下ようになる。

P: 彼女は世間の非難にさらされて辛い時を過ごした。

Q: 話し手が心配するなど励ました → 彼女は少しは勇気づけられた。

P': (それでも) 彼女は辛い時を過ごした。

still があることで、話し手は実際にことば

にはしなかったが、10年前のできごとを思い出して、当時の彼女の苦しみを再主張していることが明らかになる。

still が先行発話と対立する内容を述べるという点は、ほかの類義語と同じである。ほかの類義語の場合は、先行発話Qと当該の発話のPの二者の間の対立関係を見ればよい。しかし still の特徴は、先行する発話よりもさらに前で述べられている、あるいは暗に示されることを再主張するという点である。したがって、still の用いられ方を理解するには、still の直前の発話を遡って広範囲の文脈を読み取る必要がある。

#### IV. 情報の流れと文中における談話標識の位置

この章では、談話標識が文・発話で用いられる位置によって、どのような違いが生じるかを見る。談話標識が用いられる位置によって機能が異なる場合もあるが（注2）、ここでは談話における情報の流れに注目する。

##### IV- 1 (1). 情報源を示す according to

according to は文頭で用いられることが多く、主文の情報源を明示し、その言質を話し手以外の第三者に委ねることを表す（松尾・廣瀬・西川 2015：116）<sup>1)</sup>。文頭以外に、文中や文末で用いられることもある。この節では、according to の文における位置での違いを見る。

##### IV- 1 (2). 文中で用いられる場合

according to は前後をコンマで区切り、挿入的に文中で用いられることがある。通例主語と動詞の間に挿入される（Biber, Johanson, Leech, Conrad et al. 1999：872）<sup>3)</sup>。according to に後続する情報源が先行の談話で既出の場合、文中で用いられる傾向がある。

次例は、ハーバード大学宗教象徴学者のラングドン教授と、グッゲンハイム美術館長の

アンブラの様子である。2人は、バルセロナにあるカトリック教会の礼拝堂内に設置されているバルセロナ・スーパーコンピューティングセンターに入る。人工知能のウィンストンが彼らの案内役を果たしている。

(4) Inside the main sanctuary of the deserted chapel, Langdon and Ambra followed Winston's voice around the perimeter of the two-story supercomputer. Through the heavy glass, they heard a deep vibrating thrum emanating from the colossal machine inside. Langdon had the eerie sense that he was peering into a cage at an incarcerated beast. The noise, *according to Winston*, was generated not by the electronics but by the vast array of centrifugal fans, heat sinks, and liquid coolant pumps required to keep the machine from overheating.—Brown, *Origin* (人気のない教会の礼拝堂で、ラングドンとアンブラはウィンストンの声に従って、2階建てのスーパーコンピュータの周囲を回った。分厚いガラス越しをとおして、中の巨大な機械から出る低い振動音が聞こえた。ラングドンは、檻をのぞき込んで監禁された獣を見ているような得体の知れない感覚に襲われた。その音（＝ガラス越しに聞こえる低い振動音）は、ウィンストンによると、電子機器ではなく、遠心ファンやヒートシンクや液冷却ポンプなど、機械の過熱を防ぐのに必要なさまざまな装置から出ていた。)

according to に後続する情報源の Winston は、前出の Winston's voice のことである。当該の文で情報源を強調する必要はなく、ガラス越しに聞こえる音に関する情報が伝えるべき事柄である。

##### IV- 1 (3). 文頭で用いられる場合

当該の談話において情報源が初出で重要な

場合は、according to が文頭で用いられる傾向がある。

次例は、ある資産家が殺害されたことに関する、警察署長と記者のやり取りである。

- (5) “Chief Burnett, didn’t the house have an alarm system, and if so, was it turned on?” “*According to* the butler, it was always turned on at night. …”—Sheldon, *Sky* (「バーネット署長、(殺された資産家の) 屋敷に防犯装置はついていなかったのですか? あったのなら、装置は作動していたんですか?」 「執事の話によると、防犯装置は夜間は常に作動しているそうです。…」)

ここでは、署長は取り調べで得た情報の出所を明示したうえで、記者の質問に答えている。

次例は、テッサという女性が遺した忘備録の一部である。ケニア・ナイロビの英国外務省一等書記官の妻であるテッサが、ケニア内陸部での援助活動中に惨殺された。アーノルドはアフリカ人の援助活動家の医師で、テッサに同行していた。2人は、ある薬がからむ大きな陰謀を暴こうとしていた。備忘録のこの部分では、テッサはある専門誌からの引用を書き写し、何か所かに赤線を引いている。例文では下線部がそれにあたる。その引用部に関する彼女自身のメモである。

- (6) As regards talks at scientific meetings and advertising by pharmaceutical companies one needs to be even more skeptical … the opportunities for bias are enormous … [Tessa’s note : *According to* Arnold, big pharmas spend zillions buying up scientists and medias to plug their product. …] —le Carré, *Gardener* (科学(医学)分野の学会発表と製薬会社による宣伝に関しては、さらに疑ってみる必要がある … 偏っている可能性が大いにある … [テッサのメモ: アーノルドによれば、大きな製薬会社は何

十億もの大金を使って科学者やメディアを買収し、自社製品を宣伝させている。…])

ここでは、後続の製薬会社に関する情報はテッサ自身が得たものではなく、アーノルドから聞いたものであることが明示されている。備忘録のほかの箇所では、彼女自身の意見には情報源を明示する記述、たとえば in my opinion や I think などの表現は用いられていない。

(5) (6) いずれの例でも情報源は初出で、それぞれの文脈で明確にする必要がある。

#### IV- 1 (4). 文尾で用いられる場合

according to は、前にコンマを置き、文尾で用いることが可能である。according to に後続する情報源が先行の談話で既出の場合には、文尾で用いられることがある。次例は、FBIメンフィス支局長と、ニューオーリンズ連邦検事局地区主席検事の会話で、トルーマンは、FBIニューオーリンズ支局長である。問題になっている事件とは、メンフィスで起こったボイエット上院議員の殺害をめぐるものである。ある少年が、ひょんなことから議員の死体の隠し場所を聞いてしまった。それは、FBIが欲しかった情報である。

- (7) “… And I’ll work on the case until noon tomorrow, then my pal Larry Truman here can have it. I’ll be finished.” “Unless, of course, you get a call from Washington.” “Yes, unless, of course. I get a call from Washington, then I’ll do whatever Mr. Voyles tells me.” “I talk to Mr. Voyles every week.” “Congratulations.” “The Boyette case is the FBI’s top priority at this moment, *according to him*.” “So I’ve heard.” “And I’m sure Mr. Voyles will appreciate your efforts.” “I doubt it.”—Grisham, *Client* (「… あしたの正午までは、この事件の仕事をします。そのあとは、ここにいる同僚のラリー・トルーマン

が引き継ぐことになるでしょう。私はもう関わりません」「もちろん、ワシントンから電話がなければだがな」「ええ、もちろん。ワシントンから電話があれば、ヴォイルズ長官から命令されれば、従わざるをえませんが」「私は毎週、ヴォイルズ長官と話をしてるんだよ」「それはけっこうなことだ」「ボイエット上院議員殺害事件は、現時点でFBIの最優先事項になっている、長官の話ではね」「私もそう聞いています」「そして、長官はきっときみの仕事を評価してくれるだろう」「そうでしょうかね」)

情報源のヴォイルズ長官は直前に出ていて、それがゆえに according to の後は代名詞の him となっている。

次例は (7) と同じ小説からの引用である。FBIが欲しがっているトップ・シークレットの情報を知ってしまったために、マフィアに狙われることになった少年に関する記述である。attorney は彼の弁護士である。

(8) He slipped into a new yellow tee shirt, and pulled on his new but dirty Wal-Mart jeans. No socks. He wasn't going anywhere for a while, *according to* his attorney.—Grisham, *Client* (彼は新品の黄色いTシャツをさっと身につけ、新品だが汚れたウォルマートのジーンズをはいた。靴下ははかない。しばらくはどこへも出かける予定はなかった。弁護士が言うにはそういうことだ。)

このパラグラフでは he を主語にして少年の様子が述べられている。Tシャツもジーンズも身につけたが、靴下ははかない。この流れでは靴下をはかない理由が伝えるべきことで、情報源は付加的な事柄である。ただし、ここで according to 以下がなければ、出かけないことは彼の意志だと解釈される可能性がある。やはり必要な情報である。

according to は文頭で用いられることが多

いが、先行の談話で情報源が既出の場合は文中や文尾で用いられる傾向がある。文中で用いられる場合は、通例、先行する主語を際立たせて焦点化する。文尾の場合は情報源が付加的に示されるが、単に付け足しているのではなく、「～によるとそういうことだ」と主文の内容を権威付けしたり、主文が話し手(書き手)自身の見解ではないことを念押しする。文中の位置で according to の機能が変わるわけではないが、当該の談話の文脈を追ってみると、用いられるべき適切な位置があることが分かる。

#### IV- 2. however

however が用いられる位置は文頭、文中、文尾と自由度が高い。どのような要因によって however の位置が決まるのかを、情報の流れに注目してみていく。

##### IV- 2(1). 文中で用いられる場合

話題となる対比項目を明確にする場合、however は文中で用いられる傾向がある。次例は、ウォリーという弁護士に関する記述である。彼はふだんは出勤時間に事務所にやって来ない。オスカーとウォリーは法律事務所の同僚である。

(9) Oscar arrived at nine. With Wally, whole life was far less organized, one never knew. … On this momentous day, however, Wally arrived a few minutes before eight with a big smile and clear eyes. “Good morning, Ms. Gibson,” he said with conviction.—Grisham, *Litigators* (オスカーは9時に(事務所に)やって来た。ウォリーに関しては、ふだんの生活がまったくと言っていいほど規則正しくない。いつ出勤して来るかわからなかった。…ところが、重大な出来事が起こるこの日、ウォリーは満面に笑みをたたえ、澄んだ目をして、朝8時数分前にやって来た。「おはよう、ミズ・ギブスン」

彼は自信ありげに言った。)

「重大な出来事」とは、のちに薬害をめぐる巨大訴訟につながる案件である。事務所で遺言書を作成した依頼人が亡くなったが、死因に疑わしい点があるという。したがって、momentous day は重要な情報である。ふだん (whole life) とこの日を対比させている。

次例は、美術館を訪れたハーバード大学の宗教象徴学者と案内役の人工知能のウィンストンのやり取りの一部である。教授は現代美術の魅力が理解できず、現代美術と奇妙なだけの作品の見分けがつかないと言う。

(10) Winston's reply was deadpan. "Well, that is often the question, isn't it? In your world of classical art, pieces are revered for the artist's skill of execution—that is, how deftly he places the brush to canvas or the chisel to stone. In modern art, however, masterpieces are often more about the *idea* than the execution.…"—Brown, *Origin* (ウィンストンの返答はそっけないほど淡々としていた。「まあ、それはよくあるご質問ですよ。あなたの専門である古典美術の世界では、作品は芸術家の制作技術で称えられる—言い換えれば、芸術家がいかに巧みにキャンバスに筆を走らせ、ノミで石を彫るかが評価されるのです。しかし現代美術では、傑作は制作よりむしろ発想に基づくものであることが多い。…」)

ここでは、古典美術と現代美術を対比させている。

このように、話題となる対比項目を明確に示す場合、however は対比項目の後で用いられる傾向がある。

#### IV- 2(2). 文頭で用いられる場合

前言や先行談話全体との対比を表す場合、however は文頭で用いられる傾向がある。次

例は、弁護士とライアンの法廷でのやり取りである。ライアンはロンドンでULAという組織のテロ事件に遭遇した。それに関わったとされるテロリストが被告になっている。

(11) "… You did not see him fire, did you?"  
 "No, sir." "So it might have been dropped by someone in the car. My client might have picked it up and, I repeat, been doing the same thing you were doing—this could all be true, but you have no way of knowing this, do you?" "I cannot testify about things I didn't see, sir. *However*, I *did* see the street, the traffic, and the other pedestrians. If your client did what you say, where did he come from?"—Clancy, *Patriot* (「… あなたは、(被告である) 彼が撃つところを見なかったんですよね?」「見ませんでした」「すると、それ(=銃)は車の中の人物が落としたのかもしれない。私の依頼人がそれを拾い、繰り返しますが、あなたと同じこと(撃たれた人を助ける)をしていたかもしれない—それが真相だった可能性もあるのに、あなたはそれを知りようがない。そうでしょう?」「私は実際に見なかったことを証言することはできません。しかしながら、私は通りと往来と、そしてほかの通行人をこの目で見ました。あなたの依頼人があなたの言うようなことをしていたのなら、どこから来たのですか?(=通りの反対から来たはず。でもそんな時間はなかった)」)

ここでは、前言の「見なかったことを証言できない」と、実際に目撃したから証言していることを対比させている。

次例は、女性ばかり10人を狙った連続誘拐事件を捜査している女性の刑事と、その友人のやり取りである。

(12) "I've been engaging in my own sting operations," she confesses. "Dressing like



potential victims. I look like a potential victim.”…“Yes, with your blond hair, body build, air of intelligence. But your demeanor isn't that of a victim. Your energy is strong. *However*, that could simply present more of a challenge to the killer. More exciting. A bigger coup.”—Cornwell, *Fly* (「1人でおとり捜査してるの」と、彼女は打ち明る。「犯人に狙われそうな格好をして。私は被害者と似たタイプだから」…「そうね。ブロンドの髪、体つき、知的な雰囲気。でもあなたのふるまいは被害者らしくない。エネルギーが強力だわ。それでも、犯人にとっては、これ以上挑戦しがいのある人物はいないのかもしれない。刺激的で、大きな標的ってことね」)

ここでは、前言の「彼女が犯人のタイプではない」と対比させて、*however* 以下で標的になる可能性があることを述べている。ちなみに、“But your demeanor …”の *but* では、前言の「犯人のタイプである」ことが否定されているが、*however* では前言の「犯人のタイプではない」ことは認めるが、それでも標的になるかもしれないと述べている（注3）。

このように、前言や先行発話全体との対比を表す場合、*however* は文頭で用いられる傾向がある。

#### IV- 2(3). 文尾で用いられる場合

文頭・中より頻度は低いが、*however* が文尾で用いられると、対人関係に関わる話し手の態度が表される傾向がある。次例は、私立探偵と元夫リッチーのやり取りである。彼女は家出して行方不明になっている娘を探し出してほしいと、銀行家から依頼されている。娘は売春婦になっている。トニーは、売春組織の元締めである。

(13) I told him about the Irish guys. “That’s it,”  
Richie said. “All you know is two Irish guys?”

“That’s all Tony said.” “Tony thinks all non-Africans are Irish,” Richie said. “Doesn’t mean it’s anyone we know.” When Richie said we, it always meant his family. “I know.” “I’ll ask around, *however*,” he said. I nodded.—Parker, *Honor* (私は（家出した娘を探しているという）アイルランド人の男たちの話をした。「それだけか」とリッチーが言った。「2人のアイルランド人の男だってことしか？」「トニーはそれだけしか言わなかったわ」「トニーは黒人でない奴はみなアイルランド人だと思ってるんだ」リッチーが言った。「それだけじゃ、おれたちが知ってる奴がどうか分からないよ」リッチーが“おれたち”というときは、常に家族のことを指していた。「そうね」「尋ねてはみるよ」と、彼は言った。私はうなずいた。)

「それだけじゃ、おれたちが知ってる奴がどうか分からない」という発言の発話意図は、尋ねてもしかたないから尋ねるつもりはないということである。*however* の主発話は、文字通り「尋ねてみよう」という意味である。*however* によって、「その情報だけじゃ自分たちが知っている奴がどうか分からない」という事実は認めるけれど、尋ねてみよう」と、相手に対する配慮を示している。*however* がなければ、話し手であるリッチー自身の前言“Doesn’t mean it’s anyone we know.”と矛盾する発言をしているだけになり、「尋ねればいいんだろ」と強い調子になるように思われる。

*however* の文頭と文尾における違いを、発話のはじめと終わりの観点から見る。これらの場所は周辺部（peripheries）と呼ばれる。周辺部という概念は、歴史語用論の分野で使われ始めた。発話のはじめは「左の周辺部（Left Periphery = LP）」、おわりは「右の周辺部（Right Periphery = RP）」である。LP は当該の発話を先行談話につなげる機能を持ち、話し手自身の態度や判断、考えを示す主観的

な (subjective) 特徴がある。一方 RP は、聞き手に対する配慮や関心を示す間主観的な (intersubjective) 特徴がある (注 4)。文頭の however では、話し手 (書き手) が先行談話と対比的だと考える内容が導入される。一方、文尾では、「… (先行発話) は認めるが、～ (however の主文) だともいえる」と相手に対する気遣い、つまり対人関係に配慮した表現になる。(13)では、「おれたちが知っている奴かどうか分からないことは認めるが、尋ねる意志はあるよ」ということになる。

## V. 談話標識による発話意図の明確化と先行文脈の読み取り

談話標識はそれ自体で話し手の発話意図に関する情報を有するが、先行する談話の文脈から得られる情報を読み解かなければ談話標識が表す発話の意図を正確に読み取ることはできない (注 5)。次例は、フランシス・パイとその愛人ジャックのやり取りである。フランシスの夫サー・マグナスは資産家だが、夫婦仲はうまくいっていない。ある時、パイ屋敷の家政婦が、掃除機のコードに足を引っかけて階段から転がり落ち、首の骨を折って亡くなった。密室状態の屋敷内で倒れていた家政婦を助けるために、庭園管理人が家の裏手のガラスを割って入った。その後、ガラスをそのままにしておいたので、泥棒に屋敷を荒らされてしまった。

(14) “... But a big house like that. A wire stretched out across the stairs. You never know what might happen. Maybe those burglars of yours could return and finish him (=Magnus) off.” “You’re not serious!” “It’s just a thought.” Frances Pye fell silent. This wasn’t the sort of conversation to be having, particularly in a crowded restaurant. But she had to admit that Jack was right. Life without Magnus would be considerably simpler and

a great deal more enjoyable. It was just a shame that lightning didn’t have the habit of striking twice. *On the other hand, though, why not?*—Horowitz, *Maggie* (「…でも、あんな広い屋敷だからさ、コードが階段のところに伸びていたんだらうね。何が起こるか分からないよ。もしかしたら、その泥棒たちが戻って来て、マグナスにとどめを刺してくれるかもしれないな」「なんてことを言うの!」「ちょっと思っただけだよ」フランシス・パイは黙り込んだ。こんな会話はしちやいけな。とりわけ、混みあったレストランでは。それでも、ジャックの言うとおりでと認めざるを得なかった。マグナスのいない人生ならばずいぶん単純で、ずっと楽しいだろうに。残念ながら、雷は二度同じ場所に落ちることはないわ。でも、反対に、落ちることがあってもいいじゃないの?)

まず、why not? は、否定語を含む提案などに反論して「(なぜ駄目なのか) …してもいいじゃないか、…するのは当然じゃないか」の意を表す (内田 (編) 2009:634)。<sup>4)</sup> すなわち、前言に対する反論である。on the other hand は前言と対照的なことを述べる際に用いられるが、それぞれは両立し、互いに矛盾することはないし、いずれか一方を否定するものではない (松尾・廣瀬・西川 2015:161)。<sup>1)</sup> though は、先行発話の真実性や重要性を減じるコメントを付け加える (松尾・廣瀬・西川 2015:100-101)。<sup>1)</sup> この例での前言は「雷が同じ場所に再び落ちない」、すなわち、家政婦と同じようにマグナスがコードにつまづいて階段から転がり落ちて死ぬようなことは起こらないということである。on the other hand によって、それとは逆のことが導入される。「雷が同じ場所に再び落ちる」、すなわち、マグナスがコードにつまづいて階段から転がり落ちるなどして死ぬということである。on the other hand で前言と対照的なこと

を導入するが、それが実現する可能性と前言が実現する可能性が両立することを表す。次に *though* で、前言の真実性を減じる。おそらく、主文の *why not?* という言語情報だけではこの発話（フランシスの思考）は解釈しづらいと考えられる。したがって、談話標識が話し手の「夫のマグナスに死んでほしい」という発話意図の明確化に寄与していて、明確化には文脈から得られる情報の読み取りが欠かせないと言える（注6）。

## VI. おわりに

本研究では、談話標識と文脈の関りを考察した。*still* を例に、類義表現との違いを考える際に、談話標識が用いられる文脈から得られる情報を精査する必要があることを述べた。次に、*according to* と *however* を例に、談話標識が用いられる一連の談話の文脈の情報の流れと談話標識の文中における位置には密接な関係があることを論じた。最後に、談話標識が用いられる主文の言語情報だけで話し手の発話意図を理解するのが困難な場合には、談話標識が発話意図の明確化の手がかりとなる。明確化には、先行する文脈から得られる情報を読み解く必要があることを述べた。

談話標識は話し手の発話意図を聞き手に知らせる言語表現で、当該の表現が用いられる文脈を考慮に入れずにその機能を論じることができない語用論的要素である。このことは、書き言葉でも当てはまる。今後、一連の談話の文脈との関りという観点から談話標識を見直していきたい。

## 注

1. このことは、岩井 (2017)<sup>5)</sup> でも指摘されている。また、*native speaker* によると、*still* を文頭で用いると、“questioning yourself and doubting what you previously

*decided*”で、しばしば最終的な判断にたどりつく過程で用いられるということである。

2. たとえば、*anyway* は文頭では「それはそうと、とにかく」の意で本題導入や話題回帰、話題終結を表し、文尾では「(それでも)とにかく、いずれにせよ」の意で譲歩を表す。また、*after all* は文頭では「だって～だから」の意で根拠や理由を表し、文尾では「結局 (は)、結果的に」の意で期待や計画に反する結果を表す (松尾・廣瀬・西川 2015)<sup>1)</sup>。
3. *however* に関しては、松尾・廣瀬・西川 (2015: 45-46)<sup>1)</sup>、*but* に関しては同書 (2015: 192-194)<sup>1)</sup> を参照。
4. Traugott (2017:62-63)<sup>6)</sup>、澤田・小野寺・東泉 (2017:4-5)<sup>7)</sup>、および、高田・椎名・小野寺 (2011: 31-33)<sup>8)</sup> を参照。
5. 談話標識がもつ情報の豊かさに関しては、松尾 (2020: 8-10)<sup>9)</sup> の「談話標識で読者に想起させる情報」を参照。
6. 引用した箇所は、話法の観点からも興味深い。話法とは、他人のことばを語り手の談話に導入する手段である。まず、最初の引用符の箇所は話し手の発話をそのまま引用する直接話法である。続く *Frances … silent.* は語りの地の文、*This … restaurant.* は自由間接話法、*But … right.* は再び地の文、それ以降が自由間接話法になっている。自由間接話法は、直接話法と間接話法の両方の特徴を併せ持ち、登場人物の思考を表すのに用いられる。*On the other hand, though, why not?* の箇所を見ると、疑問文の構造を保持する直接話法の特徴があり、フランシスの思考を表している。したがって、*on the other hand* と *though* の使用主体はフランシスであり、この2つの談話標識で彼女の発話意図を表している。

## 参考文献

- 1) 松尾文子・廣瀬浩三・西川真由美編著,

- 英語談話標識用法辞典 43のディスコースマーカー. 研究社, 2015.
- 2) Bell, D. M., *Nevertheless, Still, and Yet* : Concessive Cancellative Discourse Markers. *Journal of Pragmatics*. 2010. 42, 1912-1927.
- 3) Biber, D., S.Johanson, G.Leech, S.Conrad et al., *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Longman, 1999.
- 4) 内田聖二編. 英語談話表現辞典. 三省堂, 2009.
- 5) 岩井恵利奈, アメリカ英語における談話標識 *Still* の分析—談話の行為構造における機能とその史的発達過程の考察—. 語用論研究. 2017. 19, 54-79.
- 6) Traugott, C. E. “A constructional exploration into ‘clausal periphery’ and the pragmatic markers that occur there. 発話のはじめとおわり：語用論的調節のなされる場所. 小野寺典子編. ひつじ書房, 2017, 55-73.
- 7) 澤田淳・小野寺典子・東泉裕子, 「周辺部研究の基礎知識」発話のはじめとおわり：語用論的調節のなされる場所. 小野寺典子編. ひつじ書房, 2017, 3-51.
- 8) 高田博行・椎名美智・小野寺典子, 「歴史語用論の基礎知識」歴史語用論入門：過去のコミュニケーションを復元する. 高田博行・椎名美智・小野寺典子 編著. 大修館書店, 2011, 5-44.
- 9) 松尾文子, 語りにおける談話標識—*Maggie Murders* を例に—. 札幌保健医療大学紀要. 2020. 6, 1-11.
- . *The Word Is Murder*. 2017. [Word]
- Ishiguro, K. *A Pale View of Hills*. 1992. [Pale View]
- le Carré, J. *The Constant Gardener*. 2001. [Gardener]
- Parker, R. B. *Family Honor*. 1995. [Honor]
- Sheldon, S. *The Sky Is Falling*. 2001. [Sky]

引用作品（〔 〕内は例文での表記）

- Brown, D. *Origin*. 2017. [Origin]
- Clancy, T. *Patriot Games*. 1987. [Patriot]
- Cornwell, P. *Blow Fly*. 2003. [Fly]
- Grisham, J. *The Client*. 1993. [Client]
- . *The Litigators*. 2000. [Litigators]
- Horowitz, A. *Maggie Murders*. 2016. [Maggie]